



本部漁業協同組合

我部政社

中学卒業と同時に追い込み漁ゲル一プの員となり、水深50mから先輩達と一緒に追い込みを仕掛けるのですが、魚を追い込みながらも、最初の頃の水深50mという海の深さへの恐怖心は今も忘れることができません。また、漁を終え、浜で捕れたての魚を刺身で食べた時のあの感動は鮮明に憶えています。漁の緊張と深い海への恐怖心が消え去り、と同時に無事浜に戻れた安堵感、そのすべてがあの刺身の味に凝縮していたように思えます。

パンツ一丁に木の眼鏡、網も木綿製で網
目が細かいので、追い込み網のそで網を
引き揚げるのに大人8名～10名の人力
が必要です。そこで、私はそこで網を引き
揚げるのに空気を入れた袋を取り付け、
水面に浮上させる方法を考案しました。
この方法は、かなりの労力軽減となり、
宮古島の伊良部等で現在も活用され
ているようです。

次第に追い込み漁にも余裕ができ、
回りが見え始めたその頃、海のきれい
さは自然豊かで生物の多様性に富み

部町のモズク養殖は、漁場が狭い海域でも順調に養殖することが可能となつたのです。

当初は、養殖方法がまったく分からず、手探り状態でのスタートでしたが、香村先生には本当にお世話を頂きました。

ところで、本部町の海は、もともと天然モズクが少なく、漁場が狭いというえに遠いという悪条件です。このような環境条件の中でどうすればモズク養殖を成功させることができのか探求の毎日でした。そんな中で三段階移植法という方法が生まれました。この方法は、苗床・中間育成場・本張り養殖場の場所を変えることで生長停滞が解消されました。この方法でモズク養殖をやつしていくことで生産量も増加し、生活も安定してきました。その頃、県の試験機

関でフリー盤状体採苗法が開発されました。これは、モズク種を純粋培養し、網へ種付けする方法です。そのおかげで、イトモヅクの養殖も可能となり、イトモヅクの中層浮式養殖法を開発しました。

モズクには、本モズク（オキナワモズク）とイトモズクがあります。これらは、同一場所での養殖はできません。なぜなら、養殖網への混入が起こり、商品価値が

「海と共に生きる」

Series 12 地域の目

漁業を続けていくことに不安を感じ始めた頃でした。そのような中でモズクと出会い、本部町でのモズク養殖に取り組み始めたのです。琉球大学の香村先生に、瀬底島にある琉大実験場でモズク養殖方法を丁寧に教えて頂き、その時に実験場で手にした「モズクの一生」というパンフレットを読み進めるうちに、モズク養殖に興味が湧き起きました。当初は、養殖方法がまったく分からず、手探り状態でのスタートでしたが、香村先生には本当に世話を頂きました。

ところで、本部町の海は、もともと天然モズクが少なく、漁場が狭いうえに遠いという悪条件です。このような環境条件の中でどうすればモズク養殖を成功させることができるのか探求の毎日でした。そんな中で三段階移植法という方法が生まれました。この方法は、苗床・中間育成場・本張り養殖場の場所を変えることで生長停滞が解消し藻体が伸長します。また、移動することにより雑草が消失するという利点がありました。この方法でモズク養殖をやめていくことで生産量も増加し、生活も安定してきました。その頃、県の試験機関でフリー盤状体採苗法が開発されました。これは、モズク種を純粋培養し、網へ種付けする方法です。そのおかげで、イトモズクの養殖も可能となり、イトモズクの中層浮式養殖法を開発しました。

モズクには、本モズク（オキナワモズク）とイトモズクがあります。これらは同一場所での養殖はできません。なぜなら、

漁場、漁期を分ける必要がありますが先述のとおり本部には限られた漁場しかないので、漁場として活用することにしました。この方法は、ロープとアンカー、浮きを使ってモズク網の固定施設を水深の深い所に設置するという方法です。本部町のモズク養殖は、漁場が狭い海域でも順調に養殖することが可能となつたのです。

1988年沖縄県から漁業士認定を頂き、2003年には名譽漁業士としても認定を頂きました。振り返れば、追い込み網漁業、モズク養殖漁業とおして沖縄県の水産業に貢献できたことは、海人冥利に尽きます。その中で、今後も太くて質の良いモズクの生産のために解決したい課題は、たくさんあります。これからも気力と体力の続く限り、一生海人としてその課題解決に頑張っていきます。ただ、私が今、最も問題と思えることは、赤土の流入による沿岸環境の破壊です。この問題は、海人全体の問題であります。ただ、私が今、最も問題と思えるのではなく危惧しています。

さて、私のこれまでの歩みは、本部町で生まれ育ち、知人、友人に恵まれ、自然を相手に仕事ができたことに始まります。また、恩納村、知念村の先輩海人の方々との出会いなど協力、ご支援の賜りあったと思います。改めてこの場を借りて感謝申し上げます。